

全盲ぜんもうのテノール歌手 新垣あらがき 勉つとむ



新垣勉は、昭和二十七年沖縄県読谷村よみたんそんに、アメリカ人の父と日本人の母の間に生まれました。

ところが、幸せに暮らしていた一家に、不幸がおそつたのは、勉が一才にも満たないころでした。

医りようしせつや医学的知識がとぼしいことが元で、勉はすべての視力を失ってしまつたのです。

すっかり見えなくなつた勉はその後、祖母と二人で暮らし始めましたが、混血で目が見えないことから、何度もいじめにあつたりして、つらい毎日をおくっていました。そんな時、歌が好きだつた祖母は、やさしく歌つてなぐさめてくれるのでした。

しかし、勉が中学二年の時、その祖母が急になくなつてしまつたのです。* 天涯孤独てんがいこどくになつた勉は、すっかり生きる気力を失つてしまいました。

暗く、悲しい毎日が続いたある日、ラジオから流れてきた賛美歌に心を引かれ、教会の門をたたきました。

勉は今までのことをすべて話しました。牧師はだまって聞いていたが、なみだを流している様子でした。

「人のためになみだを流してくれる人がいるなんて・・・」

てんがいこどく
天涯孤独
この世にだ
れも身寄り
もなく一人
ぼっち

そんな出合いの中で、人のためにつくす牧師の姿にふれ、
「自分も人のために役に立ちたい。」
と考えるようになりました。

心に光がさした勉は、勉強にも意欲がでてきました。
朝は早くから、ラジオの英語講座を聞いては、くり返し、くり返し発音の練習を
しました。

その成果が実って、全沖縄高等学校英語弁論大会で優勝し、沖縄県代表として、九
州大会に出場しました。

ある日、勉は牧師にこう話しました。

「先生、ぼくは牧師になって、人のために役立つ人になりたいのです。」
それを聞いた牧師は、

「勉君、牧師になるためには、大学に行き、聖書や多くの書物をまなばなければなり
ません。目が不自由だと苦労することが多いぞ。」
と、心配して言いました。

「先生、ぼくは、自分がどこまでやれるか、ためしてみたいのです。」
勉の力強い言葉に、しばらく考え込んでいた牧師は、静かにうなずきました。

大学に進学しようと決意してからの勉は、寝る時間もおしんで勉強しました。
盲^も学校高等部を卒業した勉は、大学の神学部に入学することができました。

ボイス・
トレーナー
発声方法や歌
い方などの指
導する人。

入学した勉は、点字の本をたくさん読む日々が続きました。さらに、講義も熱心に聞き、点字に打ちながら、ノートをまとめていきました。

大学を卒業した勉は教会の牧師として働いていましたが、心の支えだった歌を本格的に勉強したいと思い、世界的なボイス*トレーナーのオーディションを受けることにしました。勉の歌を聞いたトレーナーは「君の声はラテン的な明るいひびきを持っている。神様からのプレゼントです。この声で、一人でも多くの人を元気づける歌をうたいなさい。」と、言ってくれました。それから勉はトレーナーの厳しいレッスンを続けながら、三十四才の時、難関の武蔵野^{むさしの}音楽大学声楽科に一番の成績で、入学を果たしました。しかし、全盲の入学者は初めてだったので、点字の教科書がありませんでした。そこで、外国語で書かれた教科書を取り寄せて、それを日本語に訳した自作の教科書を作って勉強しました。



また、有名な歌手の歌を聞くと「どのような姿勢で、どのように歌っているのか。」
「口の開け方、筋肉の使い方は。」
などと、熱心に先生方にたずねたり、テープに録音して、研究しました。ピアノの練習もあり、目が不自由な勉にとっては、つらい時もありました。点字の楽譜を全て覚

え、手探りで見えないけん盤の位置を探して弾かなければならず、他の学生の何倍も時間がかかるのでした。

こうした努力の末に勉は、中学、高校の教員めん許も取得することができました。「音楽のすばらしさを見極めよう。」
勉は、それだけに満足せず、武蔵野^{むさしの}音楽大学の大学院まで進み、音楽の研究を続けました。



大学院を終える時、原こう用紙百六十枚に及ぶ修士論文を書き上げ、一番いい成績の人に与えられるSをもらい、修了することができました。

現在、勉はその才能を開花させ、世界に通用するテノール歌手として、あらゆる分野で活躍しています。さまざまなコンサートのかたわら、全国の学校や病院、福祉施設を回り、歌を通して、人々に感動と希望と生きる勇気を与え続けています。